

百本の桔梗束ねし夢うつゝ

藤田湘子

「百本」で思い出したのは、まず、森澄雄の「ぼうたんの百のゆるるは湯のやうに」であり、高濱虚子の「ゆらぎ見ゆ百の椿が三百に」だった。その後、正岡子規の「鶏頭の十四五本もありぬべし」も思い浮かんだ。

かつて原始人が狩猟生活をしていた頃、捉えた獲物の数は「ひとつ、ふたつ、みつつ、たくさん」だったと聞いたことがある。確かに、三つ以上の数を瞬時に見分けるのは難しい。「百」とは、多数の代用語に過ぎない。

花屋の店先で「桔梗を百本お願いします。」とでも言わない限り、正確にその数の代金も払えない。

ふと目覚めた湘子は、野原で桔梗を摘み大きな大きな花束を誰に渡そうとしていたのだろう。